
マレピトの楽園

山下しんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビトの楽園

【Nコード】

N4670Z

【作者名】

山下しんか

【あらすじ】

ふと気がつくくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、ごく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。天をあおぎ見ればうらかな日差し。

目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。

そして、デカイ氷に包まれている自分。

凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。

秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に目の前の二人の元
で働く事となるのだが……。

短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し
訳ありません。

序章 狐男と妖精女

??そう、貴方は言霊使いなのですか??

??ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは??

??なら、いつそこちらにいらっしやいませんか？ 良いところで
すよ、こちらは??

??分からない？ そう、貴方には分からないかも知れませんね??

??でも大丈夫。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導い
て差し上げますから??

??私？ 私の名は??

気がつくと、幸田（こうだ）一命司は瓦礫に埋もれるようにして、
椅子に座っていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物
の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして
その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはつい
さつき出逢ったばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅の髪の妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾まで生やした姉
似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊の中から顔だけ出している

という異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽の光の下で見ると、一人?? 姉かと思っってしまった者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思えた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣ぎぬみたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人?? 女の子、と思った人物も、尖った耳が時折動くし、チャイナドレス?? というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体躯たいくを包んでいる。どれを取っても目を引くが、その小さな背丈せたいに比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

(ロリ巨乳……)

思わず、そんな四文字が命司の脳裏のうりを掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのような視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似的キツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からない言語で。

だが、言葉は分からないものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかった。つまり、少なくともそのテの方々から男寄りの存在だろうと思う。とはいえ、まだ明確には分からないが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒らちがあかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。

「いや、分かんないって。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだったら、マジで許さないからな？」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているだろうしようもない姉でも、多分ここまで凝ったイタズラはしないはずだ。そうは思っただけでも、命司はあの姉に関して、いつでも『万が一』を考えてしまう。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したもの

か、一本の細く尖った氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のように持って、命司の顔に近づけてくる。

「お、おい、何する気だよ？」

ゆっくりゆっくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるかわからない恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。

が、それも??

「うわあ！ やゝめえゝろあゝ！」

命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体軀からは想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむった。すると、

(なんか……書いてる?)

ひんやりとした、細く固い感触が瞼の上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞっていく。それから耳が終わると、今度は唇から顎(あご)、一喉にかけてなぞっていった。

そして??

「おい、聞こえとるか？ 言葉分かんねやったら、眼え開けてみい」
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。

(か、関西弁?)

命司はゆっくりと瞼を開いていく。

「やった！ さっすがマイスター！ だゝい成功〜！」
右手すぐ傍から、今度は女の子が理解出来る言葉を紡いだ。

「ねえねえ、キミ、どこから来たの？」

女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖った耳の先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。

だが、

「しゃしゃり出てくんな、このロリが」

不意にキツネ顔はそう言うと、女の子を一睨みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。

「ロリじゃないよお。マイスター、あたしが二十三だって知ってるじゃん」

「そのナリで言うても説得力皆無やるが。とにかく黙っとれ。やつと話通じるようになったんや、脱線さすな」

どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に今にも掴みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もつとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。

「まあええ、取り敢えず名前からや。俺はユート。ユート・ユーゼン。で、こつちのロリガキは、サラ・アフメドや。お前は？」

不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気滲ませて、その狐男？ユートはそう訊いてきた。

「違うから！ ロリじゃないから！ 結婚できる歳だからねあたしは！」

ロリガキ？？もとい、サラが横から口を挟む。が、再度ユートに睨まれて口をつぐんだ。

「え……命司……幸田……命司っす……」

取り敢えず、氷漬けになって身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思った。

「エーメイジ・コーダ・メイジツス、か。アホっぽい名前やな」

言つて、ユートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものかが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字

??歴史や国語で習った『甲骨文字』とかいうものに近い。

とまあ、それはひとまず置いておくことにして、命司は取り敢えず誤りを正さなくてはならない。

「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル?」

命司がそう告げると、ユートは顔を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧されてしまう。

刹那、

「ぐあっ!」

ユートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。「あゝあ。今マイスター機嫌悪いからさ、ハキハキ答えた方がいいよ。」

さんざんユートに罵倒され、反論する度に睨まれたせいか、サラ(二三)までもが冷めた視線を送ってくる。

そして、投げて刺さったペンはそのままに、ユートは新しいペンでさっきのメモを修正していた。

「……で、メイジ・コダ君よ。お前、どっから来たん? ったく、人様の高価な機材破壊しよって。くだらん答えやったら、そのままダインのカルデラ湖に浮かべたるからな?」

「沈める、じゃないの? マイスター」

「氷は浮くやろ。まあ見ててみい。ひっくり返って、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」

「やあん、コワイ〜! マイスターったら鬼畜ね〜!」

虜囚そっちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだ。命司は思った。

「え〜と、俺はデスね……」

ここはもう、洗いざらい話すしかない。せつかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

それは、いつの記憶だろうか。

命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。

人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。

浄衣じよいに身を包んだその姿。祖父は田舎いなかの神社の神主かみぬしだった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ？「そうかそうか、イジメられたか。まあ、そんなに気にするな。人はな？ 自分おれの下に誰かがいないと気が済まんよのよ」

蝉せみ（せみ）一時雨の中で、泣きじゃくる命司を膝ひざに抱き、本殿ほんでんの階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫なでながらそう言った。

「そんなのヤだよ！ ボク、悪い事してないもん！ どうしてボクがイジメられるのっ？」

人生という名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽りふじん。それを承服しょうふくできる術すべも、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。

「それに耐えられんのだったら、じゃあ、お前おまえが強くなるしかないなあ……幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父じいちゃんが教えてやるっか？」

「……ちか……ら？」

泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。

「古来、日本には言葉に魂たましいが宿ると信じられてきた。それを『言葉霊ことだま』という。祖父ちゃんおじいちゃんはな、その使い手なんだぞ？」

何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分らない。でも、それがあんなら。それができるのなら、大好きな、祖父おじいのようように？？」

「そうしたら……いじめられない？」

「それは、お前が正しく使えたら、な。……祖父ちゃんの言うこと
守れるか？」

「うん！」

命司が力強く頷くと、祖父は愉快げに、そして嬉しそうに笑った。

意識が、浮上していく。

懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、

「じい……ちゃん……」

現実が、ふいに命司を包んだ。

(どこだ、ここ……?)

ぼやけた視界がハッキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのだ。

体育座りで手足の伸ばせない狭さの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。そして、その先に見えたもの?? いや、見えた『者』は??

(やっぱりか)

そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中心に堂々と立つのは、誰あるう命司の姉の安和だ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立されている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指の量子物理学博士。それが命司の姉だ。

性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりな女。

実家の借金苦を物ともせず、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金で大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だが??

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。「テンメエ〜っ！ また拉致りやがってゴルアアアア！ 俺を何回テメーの実験材料にすりゃ気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。安和の研究は『量子テレポート』。昔のハリウッド映画で、『ハエと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかりだ。

「素直じゃないなあ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪（ゆが）め、一安和は右手人差し指を立てて、左右に振ってみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者にキミは選ばれたんだヨ？ この超天才量子物理学博士・幸田安和様のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとうキレた。

「コーダアンナサマノネ！ ……じゃねえこのマッドサイエンティストが！ いいか？ 俺はこれからバイトなんだよ！ さっさと解放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せつかく、何の取り柄もない平凡な専門学校生のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげてるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女っぽく身体をくねらせ、わざとらしく涙を見せる安和。その態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟だという事が、命司は一番許せない。

「ああ！ ああ！ 確実に名前残るだろうよ！ 量子テレポートだかの、世界初の事故の犠牲者だつて事でな！ つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！ マジで俺は忙しいんだよ！ ったく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗にフェードアウトしやがったクセに！」

嫌味、懇願、ついでに恨みの文句を並べ立て、命司は狭い窓にべつたりと頬を押し付けて姉を睨んだ。

「身内だからいいんじゃない。他人だったら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？ それに、親の借金で子供が苦しむのは理不尽だわ」

しらっと涼しい貌で、安和は微笑んで見せる。

知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。

「身内の方が問題あるよボケえ！ つか、マジやめろよ！ マジでバイトあんだつて！」

猛り狂う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬啞然とさせた。「ああ、今日行けないって連絡しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？ その歳でステに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思つたんじゃない」

啞然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗き窓をステキな赤色に染めていく。

（このアマああああ……！！）

社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期に及んで、実の姉から浴びせられるとは。

「大きなお世話だこのヤロウ！ まだ負け組だつて決まってねえだろが！ つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええっ？ 勝ち組様よお！」

そう吠えつつも、しかし命司は姉の立ち位置??その一点だけは

分からない訳でもなかった。元々、宗教にハマった叔母の保証人になった、お人好しの親父が悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国に出稼ぎ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。

命司の剣幕に、安和は苦笑を浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑へと変わる。

「やれやれ……まったく、だからアンタは負け組脳だつてのよ。いい？ この実験が成功したら、どんだけの金が入ってくるか分かってる？ ハッキリ言つて、ザックザクのウツハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司にはある。

（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思いますよ？ オネエサマ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑（よ）かれた一亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知っている命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいたいと思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら？

「知らねえよ！ 分かりたくもねえし！ 俺は学費稼ぎたいだけなんだよ！ 分かったらサツサと俺を帰せブス！」

憤懣を言霊に乗せ、命司は放った。

だが、命司の不用意な罵詈雑言に、安和は刹那、不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌を見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額から頬を伝って落ちていく。

（……そうだ、姉貴、言霊に耐性あったんだつた）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言霊』の存在に気付き、命司の言葉に身構えるようになった。つまり、最初から気構えを持って聞けば、命司の言霊は効力を失う。その程度の能力なのだ。

そして、放った言葉は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫さかなでする結果となった。

安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔に向けた。
(「バイヤバイヤバイヤバイ!」)

満面の笑みで、助手に何事かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まっている。

「んじゃ、さつさといっちゃいましょーか」

刹那つなに唸る機械群。

「お、おい、マジやめろよ……」

不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、
実弟じつていの懇願こんがんにも姉の笑顔は崩れない。

安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子おとなしを優しくあやすかの様に。

「ダイジョーブだって。犬とネコは戻ってきたから。……ミルクしか飲まなくなっちゃったけど」

「ダイジョーブじゃねえよソレ! 幼児退行してんじゃねーか!

つか、人格崩壊ほうかいするかもだろソレ!」

「ダイジョーブだって。ジューブン微調整びちゆうせい繰り返したんだからあ」

「ダイジョーブじゃねえよ! 微調整でなんとかなる問題じゃねえ

からソレ! つか、ハエとか一緒に入ってねえだろうなっ?」

「あ、さつきカマドウマみたいの入ったかも。まあ、いつか」

通称『便所コオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄せんりつが走った。

「どうせならバツタがいいです! 是非バツタにチェンジして下さい

い!! それも今すぐ!!」

錯乱さくらん、いや狂乱きやうらんし、命司の口をついた的外れの最後の懇願こんがん??と

いうより、むしろ哀願あいがんも??

?? 姉の笑顔には届かなかった。

「……んじゃ待ってるわよ? 愛いとしのマイブラザー」

ウインクと共にキスを投げってくる姉。

鳴動する機械群。

やがて、命司が入っている機械の中に、淡い光が満ちてくる。

光は粒子となり、それが、元々自身の身体を構成していたものだと

と悟った時？？

「テンめええ！ 憶えてるゴルアアアア……」

そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

(……ここどこ?)

気が付いた時、命司は『そこ』にいた。

そこは、広い円筒形の部屋。いや、部屋かどうか分からない。ただ、命司の周囲には、まるでモニター画面のようなものが、無数に浮いている。それらは、特に機械のボディを持っている訳ではない。あくまで、液晶モニターから『画面』だけを抜き出したかのようなものが、厚みを感じさせずに浮いているだけだった。

近くのを観察すると、それらはまるで、ドラマの一シーンを放映しているかのように常に動いている。

壮大な自然、

巨大な異形の生き物、

一見すると人間に見えるが、ツノやシッポの生えた何か。

違う画面を見る度に、違った景色が見えてくる。

今の人類よりも、遥かに文明が進んでいるかのような都市が見えたかと思えば、

まるで石器時代の建物ばかりの集落が見えるものもある。

「……なんなんだ、ここ……」

ひよつとすると、以前から念願だった、宇宙人に拉致されたという状況かも知れない。そう思ったが、自分以外に誰も見えない場所で、それを示す証拠も何もない。

命司はしかたなく、画面の一つに触れようとした。と、その時??

(そこでいいのか?)

そんな自問が湧いた。

「……つつたつて、他にできそうな事無いし……どうやったら、元の場所に戻るんだ?」

ただ独り、自答を返す。

(戻りたい？ 戻りたいのか？)

刹那せつなの自問。気が付けば、目の前の画面には、姉・安和あんなが慌てふためいている姿が映っていた。

「ハハ……バカだなアイツ。なに今さら慌ててんだよ………どんだけ自分の技術、過信してたんだ………？」

がっくりと頂垂うなだれる安和の様子に、あんな姉でも心配してくれてるのか、と、そう思った時??

安和は指を鳴らすと、助手達に指示をして室内の照明を落とし、そのまま彼らを率いて出て行った。

「……ク……クククク………」

思わず、笑声がこぼれた。

「そういえばそうだ。躊躇ちゅうちゆなく弟で人体実験を繰り返してきた姉が、今更いまさらこんな事で、嘆き悲しむハズがない。あの去り際に見えた苦笑くしやうは間違いがない。これまでがそうだったように、どこかの居酒屋で『反省会』という名目の飲み会を開くつもりなのだ。」

「まあ、仕方ねえな。こうなっちまって、今さら元の世界に未練はねえ」

冷徹れいてつにそう呟つぶやくと、同時に命司の周囲たたよに漂っていた画面が、命司の周りを高速で回転し始めた。

(じゃあ、どうする?)

再度の自問。

「そんなもん決まってる。或る意味、姉貴あには感謝してるぞ。これは、またとないチャンスなんだからな」

(元の世界に未練はないのか?)

続いた自問に、刹那、様々な顔が脳裏のうりに浮かぶ。

父と母。

友人達。

バイト仲間。

そして、大好きだった祖父。

だが、

それでも、

この欲求を止められない。

物心付いた時には、既に狂っていた国。

そこから更に、止めどなく狂っていく世界。

『力』を持つ者達の果てしない欲望の中で、

見えない何かにがんじがらめにされている『力』無き者達。

そして、その『力』無き者の一人ではない自分。

世界は?? 少なくとも、『命司が知っている範囲の世界』は、命司に居場所を与えてくれなかった。

大多数の有象無象として、ある日突然消えてしまっても、誰も気にも留めない。そんな存在でしかなかった。

「だから俺は?? 俺に居場所をくれる世界に行く」

そう覚悟が決まった刹那、

十数個の画面?? 『世界』が命司の周囲に固定された。

そして、その中の一つ、真正面に在るそれに命司は手を伸ばす。

(死ぬかもしれないよ?)

「分かってる」

(二度と戻れないかもしれないよ?)

「望むところだ」

(行った先にも、居場所なんてないかもしれないよ?)

その自問に、指先が一瞬止まる。

だが??

「……少なくとも、元の世界よりは希望があるさ」

再び動き出す指先。その指先が触れると、画面に波紋が広がり??

??命司はその中へと引き込まれた。

命司の意識に、徐々に感覚が戻ってくる。

(……狭いな)

最初に感じた、そんな感覚。どうも、またしても何かの装置に入っているようだ。

(ああ、さっきのつて、やっぱり幻覚か……眼を開けると、あのクソ姉貴がいるんだろうな)

成功だ！ とか騒ぎながら、しかし弟の事はほったらかしで、助手達と抱き合つて互いに喝采を送り、打ち上げに行きかけた所で、実験装置内の弟の存在に気付き、ようやく解放してくれる。そういうパターンだろう。

そんな事を考えながら、命司は徐々に眼を開いていく。

そして、視界がひらけたその時??

(……やっぱりね)

寂寥の想いと共に、そんな感慨が胸中に去来した。

目の前、透明な壁越しに、キツネ顔が在った。

(オイオイ、何考えてんだ? コイツ)

思わず、命司は呆れ果てた。

いつもの姉のキツネ顔。のハズが、ちよつとばかり違っている。

頭に載るは、まんま狐を連想させる耳。いつもの天然黒色の髪にまで工夫を凝らしたようで、髪は金色に輝き、綺麗(きれい)に一櫛を通された様子のそれは、左右をボブカットの様にして、後ろは短いポニーテールを作っていた。

新鮮ではあるが、カワイイつもりなのか? と、面と向かって問いたくなる。

そして、姉貴ご自慢の優秀な助手達。

(……達？ あれ？)

命司は室内を見渡した。だが、複数いたハズの助手は、そこに一人しかいなかった。

(こんな助手、いたか？)

それは、小さな女の子。

先の尖った長めの耳と、真紅の髪に施した、左側で結った肩までの長さのサイドテール。特徴的な、くりっとした大きな丸い眼差しが愛嬌たっぷりだ。

そんな彼女たちは、まるで実験の成功が信じられないかのように、微動だにせずに両の眼を目一杯に見開いて、命司を凝視していた。

刹那、命司は突然に息苦しさを感じた。どうやって入れたものか？？いや違う。レポートしたというのなら、入り口は必ずしも必要ではない。それは分かるが？？

「おい！ 開けるよ！ マジで殺す気がこのクソ姉貴！」

いよいよ酸欠がひどくなり、命司は自分が入っているガラス容器を叩いた。

だが、目の前の二人は顔を真っ青にして、必死にかぶりを振りながら、両腕を交差させている。『やめる』というジェスチャーらしいが、しかし、切羽詰った命司はそれに従うつもりも無いし、何より姉の機材なら遠慮はいらない。

意識に霞が(かすみ)かかり始めた時？？

(こ、の、クソツタレがああああああ！)

??命司は全身に力を込めて、両手足を突っ張った。多分、これで容器を破壊できなければ酸欠で死ぬ。

と、不意に眼前にヒビが走り、その容器の三分の一が割れ砕けた。「ぶはあっ！ ……ザマミロ姉貴いい……イヒヒヒヒ」

これまで受けてきた仕打ちでテンションが上昇しまくり、不気味な笑声がこぼれる。

ゆっくりと新鮮な空気を吸い込みながら、命司は床に降り立つ。ひとまず危機は脱した。あとは、どうしてか額に青筋を浮かべてい

る『姉貴コスプレバージョン』に、怒りの鉄槌を下すだけだ。「女に手を上げるなんてサイテーよ！」などと言ってくるだろうが、そんなものはカンケーない。

「往生せえやああああああ！」

命司は『姉貴獣耳バージョン』に飛びかかった。

が???

瞬時に傍らの女の子が間に入ったかと思った時、

「かはっ……………」

前方斜め下から、命司の腹を突き上げるように、ハイキックが刺さっていた。一瞬で呼吸が停止し、女の子が避けた場所にカエルのように落ちる。

(こ、このガキい)

呼吸困難で身体を丸めながら、視線を件の二人に向けると、頭上では、彼女たちが奇妙な言葉で会話している。

と、突然命司の後ろ??ちようど、命司が入っていた容器の在る方から轟音が聞こえた。それは、何かが倒壊する音。砕け、飛び散り、連鎖的に破壊音が大きくなっていく。そして、今いる建物の屋根までが崩れ???

(ヒイイイ！)

??命司の上に降り注いだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670z/>

マレビトの楽園

2011年12月17日07時53分発行